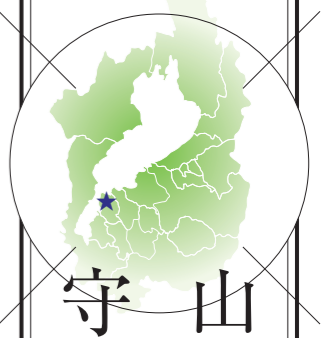


地域が変わる
地域活性化の現場



守山

びわこ豊穡の郷

ホタル、シジミが生息する水環境の改善を目指し、身近な水辺から、地域の豊かな環境づくり

琵琶湖・赤野井湾とそこに注ぐ川に、かつての豊かな自然環境を取り戻そうと、守山市の認定NPO法人「びわこ豊穡の郷」は長年、多彩な活動を展開してきた。水環境調査、モデル河川づくり、「水辺の楽校」、オオバナミズキンバイ除去大作戦など、地域に根差した問題意識と先駆的な取り組みは、守山の自然とまちを暮らしの調和に貢献している。

ホタル観賞イベントを運営 自然に親しむまちの風物詩に

初夏の夜、ほのかな光を放ち幻想的に舞うホタル。今年も5月29日から6月7日まで「守山ほたるパーク&ウォーク」が開催され、多くの人々が、市内中心部のコースを散策しながら、ゲンジボタルが飛び交う光景を楽しんだ。

このイベントの事務局として、企画運営の中心となっているのが、認定NPO法人「びわこ豊穡の郷」だ。

びわこ豊穡の郷は、1996年、「豊穡の郷赤野井湾流域協議会」として、赤野井湾とそこに流れ込む河川に、豊かな生態系を取り戻すことを目指して設立された。

赤野井湾は琵琶湖の東岸、琵琶湖大橋から烏丸半島の間にあたる水域。かつては、たくさんシジミが採れる澄んだ水域だったが、今はその姿は見られず、現在は琵琶湖の中でも水質汚濁の激しい地域の一つになってしまった。

また、赤野井湾の集水域である守山市は戦前、ホタルの名所として有名で、「守山ボタル」は24年、ホタルとしては初めて天然記念物に指定された。しかし、生息環境が悪化し、55年頃に守山ボタルは絶滅。市ではその後、ホタルをよみがえらせるまちづくりを進めてきた。

そのような中、びわこ豊穡の郷は、ホタルとシジミを環境保全の象徴として捉え、「ゲンジボタルが乱舞する故郷の再現」

の森資料館」の管理運営を行ってきた。

また、市内を流れる目田川の荒れ放題になっていった中流域約500メートルを選び、モデル河川づくりにも挑戦。01年から毎月1回作業日を受け、ごみの回収、岸辺の草刈り、護岸整備を実施。さらに中州を造成し、流れの中に、瀬や淵をつくることで、魚や水生生物の棲みやすい環境づくりも行った。河川敷にはこの地域で育った樹木を植樹し、間伐材で製作したジャンボテーパーも設置した。現在では魚や水生昆虫、水草も増え、それらを目当てにした鳥が来るようになり、ホタルのエサとなるカワナも増えている。「川の生態系が豊かになっただけでなく、人のつながりも広がっている。例えば、作業に参加された市内の自治会の方が、今度は自分の町内の川の整備に取り組

まれるようになった。そうした地域に広がる川づくりの取り組みの情報交換を行うウェブサイトを「びわこ川づくりネットワーク」も立ち上げた」と中明子事務局長は説明する。

子供の体験学習から 地域の力生かす活動まで多彩に

小学生を対象に、自然体験学習「水辺の楽校」を年3回、目田川や市民運動公園で開催している。ゴミ清掃、野草探し、川遊び、ホタルの幼虫の放流などを体験し、子供たちの環境意識を高めるのが目的だ。

湾内の環境を調査・検証する「赤野井湾探検会」も、毎年7月に催し、調査船には子供も乗り込み、釣りや琵琶湖でとれた魚を用いた料理などを楽しむ。

09年、赤野井湾に突然現れたオオバナミズキンバイが深刻な問題になっている。一刻も早い除去が必要と考え、13年に「オオバナミズキンバイ除去プロジェクト」を、



(上)整備する前の目田川
(下)緑が豊かになり人々の憩いの場

地域自治会、漁業組合、地元企業、学生NPOなどと立ち上げ、年2、3回の除去

「琵琶湖とシジミに親しむ湖辺の再現」を目標に多彩な取り組みを展開している。

モデル河川づくりから 地域に広がる川の整備

当初から取り組んできたのは、流域河川の水質や生物環境の調査。現在、赤野

井湾に注ぐ8河川80カ所で、水環境調査を年5回実施している。長年にわたる調査結果の蓄積は貴重なデータとなっている。

将来の自立を目指して、2004年にNPO法人化を果たし、05年からは市の委託を受けた指定管理者として「ほたる



「守山ほたるパーク&ウォーク」期間中に観賞できる飛び交うホタルの光景



「水辺の楽校」で生き物を探す子供たち

作業を行った。初回は100名程度の参加だったが、今では約300名が参加するほどの大規模なプロジェクトになってきている。

経営手腕評価され認定NPOに 豊かな地域づくりへ貢献

14年、びわこ豊穡の郷は滋賀県で6番目の認定NPO法人になった。

「認定NPOになったことで、寄付者にも寄付を受ける我々にも税制上の優遇措置が受けられるようになった。この利点を生かし、寄付、賛助会員をさらに獲得し財政基盤を強化したい。これからのNPOは、行政に過度に依存することなく、自主事業の立ち上げを考えなければ



大量のオオバナミズキンバイを除去する様子

ば活動を継続していけないだろう。私たちの場合は環境調査や環境教育のノウハウが活用できないかと考えている」と長尾是史理事長。昨年には滋賀CSR経営大賞特別賞を受賞し、NPOとしての経営手腕も評価された。

「ホタルは飛翔数、地域ともに広がりがみられるが、赤野井湾にシジミが戻るまでにはまだ遠い。今まで以上に赤野井湾とそこに注ぐ多くの川で、さまざまな生き物がいきいきと棲める水環境保全に取り組みしていきたい。地域の自然と暮らしや経済が調和して豊かな地域社会になるよう活動していく。多くの方々のご支援をお願いしたい」と長尾理事長は語っている。